

日本における祭り研究の整理を通じた 現代の神社祭礼の考察

—— 香川県綾歌郡宇多津町の事例 ——

倉田健太
稲田道彦

はじめに

今日の「祭り」という言葉が持つ響きからは、一つは神社で厳かに行われている祭り、もう一つは路上で華やかに行われている祭りが想起される。大きくは、柳田國男が「祭」と「祭礼」と区分した概念が相当しようが、そこに「純粹な」という冠を加えない限りは厳かさと華やかさとが渾然一体となって進んでいく現代の祭礼において、当然、両者はこのように割り切れるものではない。

このような状況から「祭り」は定義することが困難な用語で、その捉え方や評価もまた多様である。定義に関していえば、祭りが指し示す出来事が「神事」か「行事」かによって意味は異なってくる。今日、それを割り切るのが困難であることも考慮するならば、祭りの定義付けは、ある程度の特性が共有されつつも、基本的にはそれを調査する者によって行われているのが実情といえよう。⁽¹⁾ 捉え方や評価については追々見ていくこととするが、論点を先取りしてお

(1) この問題に言及した論者に、森田三郎と芦田徹郎の二者を取りあげておくと、森田は祭り一般の定義の基礎に「周期性」「聖性」をあげ（森田、1990：133-134頁）、芦田は「聖中心性」「非日常性」「共同性」「周期性」「催事性」といった諸特性からの暫定的定義を試みている（芦田、2001：29頁）。森田は、上の二つ以外に「集団関与」という特徴もあげているのだが、森田自身が祭りへの参加者を考察した際、この特徴を放棄したいと言及していることより（森田、1990：144頁）、ここでも集団関与という特徴はあえて取りあげないでおく。

くと、日本の祭り研究という言葉が示す領域は、民俗学から文化人類学、社会学へと変遷・拡大している、つまり捉え方の移り変わりを確認できる。同時に、取りあげられた祭りに対して下される評価も様々となりながら、概ね祭礼的な要素が祭りに与える影響を研究したものであることを指摘できる。

本稿の目的は大きく分けて二つある。第一には、柳田の「祭・祭礼」「公祭・私祭」の諸概念を分析の立脚点としながら、1940年代から現在に至るまでの日本の祭り研究を概観、先述の変遷・拡大を確認しつつ、諸概念を今日の文脈の中で改めて捉え直す作業がある。第二はその作業から、香川県綾歌郡宇多津町の宇夫階神社うぶしなじんじや例祭を事例に、現代の神社祭礼では「伝統維持」の様相を呈する実践と、人々が祭事に新たな趣向を凝らすこと、すなわち「風流創出」ふりゅうの様相を呈する実践が混在しているという仮説の下、そこに成立している町内・町外における影響関係を分析することである。

あらかじめ構成にも触れておくと、国家神道という背景が研究に影響を与えてきた第二次世界大戦の終結前の時期を第一章、国家神道の廃止と経済成長の影響を背景とする、終戦から高度経済成長期を経て安定成長期に至る1945年から80年代までを第二章、バブル景気とその崩壊を挟んで、政策上のキータームに「文化」が浮上してくる90年代以降を第三章と整理し、日本の祭り研究を確認する。第四章では、先述した調査地での祭りを現代の神社祭礼の事例として取りあげ、確認できた人々の実践に触れつつ、そこに成立している影響関係を図化し、分析していく。

1. 戦前の祭り研究

1-1. 国家神道と祭り研究

日本民俗学の祖と称される柳田は1941年、東京帝国大学において行った講義で「日本の祭り」を取りあげ、翌年、その講義にもとづいた著書『日本の祭』を世に出した。そこで柳田は、祭り研究について、その資料の整理や分類だけではなく、今も行われている祭りの現状を明らかにすることの重要性を説いた。

柳田の指摘した事例採集ともいえる研究を確認していくと、肥後和男の『宮座の研究』(1941)、辻本好孝の『和州祭礼記』(1944)があげられる。それぞれの概要について簡潔に触れると、肥後は「宮座」を神社と村落の関係に生じた現象として扱い、第一に宮座とは神社と氏子との関係において典型的な組織であること、第二に宮座の構造・機能からその社会的性質を究めることで、宮座以外で日本社会に埋め込まれている集団形式の研究にも寄与できること、第三に宮座は歴史的な性格を担うために日本社会の発展史において祖形をなすといった理由による研究を行った(肥後, 1941: 5-7頁)。辻本は日本各地、とりわけ山間部の村々において伝承されてきた祭事を「書かれざる歴史」「記録されざる行事」と位置付け、それらは社会の開放にともない衰退、簡略化されて古の姿を失いつつあるために記録を残す必要があるとして諸祭事を記録していった(辻本, 1944: 457-458頁)。

両者の研究について共通点を求めるとするならば、肥後が「祖形」、辻本が「古の姿」と語っている箇所より、いわば原始形を備えている対象として祭りをみていく姿勢がうかがえる。この点は、柳田が日本の祭りについて「ただ一筋の飛石」と表現した箇所、詳細には「国の固有の信仰の古い姿と、それが変遷して今ある状態にまで改まってきている実情」(柳田, 2013: 34頁)について、唯一知ることができる事象が祭りだという認識にも重なる。ここから「元々の姿形を知るために現在の祭りを見る」という姿勢が、少なくとも戦前における祭り研究の主たる流れだったと考えることができる。

ところで、これら諸研究の時代背景に「国家神道」⁽²⁾の存在があって、それとの関係のなかで研究が進められてきたことには留意する必要がある。神社における祭式や神饌幣帛料供進の制度化が、明治期を通して推し進められてきたこと、いうならば、神社とその祭りを公的に取り込んでいく流れである。葦津珍

(2) 本稿におけるこの用語の概念は、GHQの神道指令にある「日本政府ノ法令ニヨツテ宗派神道、教派神道ト區別セラレタル神道ノ一派ヲ指スモノデアル」という文言を基礎に、それを広義に解釈して明治維新以来の国家と神道との法令全時代の歴史を対象とする葦津の定義にもとづく(葦津, 2006: 8-10頁)。

彦は、名目のみでも「国家の宗祀」とする制度を確定し、表明したことによって神社への献金に影響が生じた点や、神社局が神社での祭儀礼典に一定の秩序を与え、神社の事務を公的監督下に置いて公正にした点は、形式的にせよ国家神道の史的功績だったと述べる（葦津，2006：163-164頁）。

当時の神社と政府との関係については、肥後が従来の神社研究を引き合いにだして「主として国家との関係に於いて見んとする態度であり方法」（肥後，1941：2頁）と述べている点にうかがうことができる。すなわち、記紀神話に体系化された祭神を祀る個々の神社での祭りという見方である。ただし他方には『和州祭礼記』の序文を記した柳田が「當路の指導者たちは、今までは敬神を以て唯一の道德と認め、祈願成就の歓喜と、神徳體驗の感動に向つては、わざとかと思うほど共鳴をさし控えて居た」といい「所謂公祭と私祭とのけぢめは年を追うて著しくなつたが、斯うして祭を奉仕する人々の側から見れば、何一つとして差別の點は無い」（辻村，1944：2頁）と述べているように、地域集団が維持してきた祭りという見方があることも確認しておきたい。後述する戦後の祭り研究では、後者に研究の視点が移っていくためである。

ここまで、戦前の祭り研究についていくつかの事例を、その社会背景とともに記述してきた。次節では、柳田が『日本の祭』で提出した「祭・祭礼」、「公祭・私祭」の区分と諸概念が持つ特性を検討していく。

1-2. 柳田國男による考察

柳田が『日本の祭』で、祭りの現状を明らかにすることの重要性を説いたのは先述した。その中で、今日の祭り研究でも頻繁に使用される概念として「祭」と「祭礼」があげられる。

柳田は祭りについて、四季の循環を記憶の支柱として、参加者によって伝承されてきたものを「祭」、そうした祭に見物（観衆）が集まってきたものを「祭礼」と呼び、その異なりを指摘した（柳田，2013：34-37頁）。いいかえると、

（3）ここでの「公祭」は「役所と交渉のある大祭」（辻本，1944：2頁）を指しており、次節でふれる「公祭」とは意味合いが異なっている点をあらかじめ指摘しておきたい。

祭りがもつ神事の部分を祭、非神事ともいえる見世物の要素を含んだ人寄せの部分祭礼と区別したことになる。

神社で行われる祭り、とりわけ最も盛大に斎行される例祭では、概してこの両面が付随しているわけだが、後に触れるように、今日の祭礼にはそのような祭りだけではなく「純粋なイベント」として行われているものも数多くある。その点を踏まえるならば、「祭・祭礼」の区分は、個々の祭事が神事（祭）と非神事（祭礼）のどちらに傾斜しているか、つまり祭りが持つ宗教的性格および祭りの場にある信仰の強弱を判断するうえで有効と思われる。しかし、祭りを参加者という視点から観察すると、今日極めて「祭礼」側に属する参加者は個人であり、そこで重要となるのは参加者の動機や期待、感受である。換言すれば、祭りが神事と非神事のどちらに傾いているのかといった上述の論点は、参加者自身の意味付けという今の祭りが含む問題を考察するうえで、その的を完全に捉えきれていない。

ここで柳田が「祭・祭礼」とは別に言及していた「公祭」と「私祭」の区別について押さえておきたい。

「公祭」とは、文字通り「公け」の祭りだが、柳田はこの用語について「村々の小さな氏神の社でも……祭主に該当するものは定まって動かなかった……少なくともそれはその土地限りの公けであったから、公祭と名づけてしかるべきものであった」（柳田、2013：224頁）と述べており、その地理的条件に制約を加えている。というのも、この引用箇所の前後で柳田は、伊勢神宮における祭主、祭りに奉仕した旧家を取りあげて、大神社の祭が伊勢神宮の祭と等しく見られるという推測、旧家の退転による郷土の連帯の信仰が衰える懸念をそれぞれ述べ（柳田、2013：224-226頁）、制約された場所の外にいる者の台頭や、内にいた者の衰退によって生じた信仰を「私祭」と位置付けているためである。

柳田において、土地の住民と神が強く結ばれているところにある公祭は、その土地に由緒をもたない人々が個々に行う祈願、すなわち個人祈願という私祭が流入することで弱まっていくと認識されていたように思われる。このように捉えると、私祭は場の秩序を乱すものとして語らざるを得ないのだが、いみじ

くも柳田自身が時の流れという前提に立って自論を展開しているように、私祭の広がりとは、今まで続いてきた信仰をそのまま内面化するというよりは、その中から参加者自らが選択した信仰を内面化する状況が広がっている過程だと把握できる。踏み込んでいえば、祭りに対する個人の心理的位置付け、つまり内面化された祭りの変異によって表出される態度にも違いが見られるようになった結果、公祭の弱化と認識されるようになったと考えられるが、このように、信仰が個々人に内面化されて公祭という形では見えなくなっている状況を、トーマス・ルックマンの言葉を借りて「見えない宗教」(ルックマン, T, 1976) 化の進行と捉えられるのではないか。

以上の考察より「祭・祭礼」の区分からは「神事・非神事」という両極が得られ、「公祭・私祭」の区分からは、祭りに対する個人の心理的位置付けの異なりとその態度の表出、つまり何を思いながら祭りに参加しているのかという意味付けを巡る問題を考察するうえでの手がかりが得られたと思われる。次章では、終戦から高度経済成長期を経て安定成長期に至る1945年から80年代について、その社会背景を確認しつつ、同時代の祭り研究が「祭・祭礼」においては祭礼、「公祭・私祭」では私祭へと重心を移していく過程を辿る。

2. 終戦から安定成長期までの祭り研究

2-1. 経済成長が与えた祭り研究への影響

1945年8月15日、ポツダム宣言を受諾して日本は降伏、「連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ)」による占領統治がはじまった。その政策の一環に「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件 (神道指令)」があり、当指令によって国家神道は廃止され、政教分離の原則が確立された。

戦前の諸研究が国家神道との関係を重視するものであったならば、戦後はそれ以外の研究に軸足が移ったと考えるのが自然であろう。具体的には前章で少し触れた、地域集団と祭りとの関係を扱った研究が取りあげられる。ただしその前に、両者の関係に重大な影響を与えた高度経済成長期について確認してお

きたい。

戦後、とりわけ高度経済成長期に観察された事象に、都市への人口集中があげられる。宮本又郎は、東京・大阪・名古屋の三大都市圏への人口集中度について、若年層を例にとって1950年と1970年を比較、1950年には25.7%だったものが1970年には46.9%となっていることを指摘し、産業別就業者数についても、1955年から70年にかけて、高度成長前半には第二次産業、後半では第三次産業の就業者が増加したが、その多くは第一次産業からの移動であったと説明している⁽⁴⁾（宮本、2012：192-193頁）。

上述の変化は、そこに暮らす人々の意識の変化にもつながる。これについて、本稿の主題である祭りとの関わりから見ていくと、次のようになろう。第一次産業という農林漁業を営む人間に対して、天候不順は生産に直接影響を与えてくるもので、生産の変動は生活に直結する。ゆえに人々は生活の安定を天候に求めて種々の「祭」を行う。しかし、第二次・第三次産業に従事することとなった人々にしてみれば、それは自身の居住地で毎年繰り返されている単なる「儀式」に過ぎない。果たして、生活上の意味が見いだせない儀式に参加する必要はあるのだろうか、といった意識の変化がこの時期を通して起こったと考えられる。

しかし、人口分布や産業構造、人々の意識に変化が起こった時期だということとその諸変化は以後の研究では必ず言及されるのだが、高度経済成長期における研究自体は「同族」の研究上で触れられる祭祀や民俗学領域での調査事例が主たる内容で、それは村落の祭事に焦点を合わせ記述する姿勢であったため、前章で見てきた研究と一続きの内容だといってよい。ここでは、マギの社⁽⁶⁾

(4) 三大都市圏別の集計も掲載しておく、50年の25.7%の内訳は、東京圏15.5%、大阪圏12.6%、名古屋圏7.6%で、70年の46.9%の内訳は、東京圏23%、大阪圏15.6%、名古屋圏8.3%となっている（宮本、2012：192頁）。

(5) 15年間全体での就業者は1,284万人の増加で、第一次産業では毎5年間に165～250万人減少し、第二次産業では250～350万人の増加、第三次産業では280～400万人の増加であった（宮本、2012：193頁）。

(6) 本家・分家から成る同族組織を指す用語で、本文中では「特定の本家とその分家とが結合する一種の家連合」（有賀・仲、1962：105頁）と説明されている。

会的地位を表象するものとして「マキの神（^{イェーজন}祝神）の祭り」を調べた有賀喜左衛門・仲康の考察や（有賀・仲，1962），香川県女木島の「チョウサ祭り」を調べた桜井徳太郎の報告（桜井，1959）などを例にあげておく。

もちろん，この時期の社会変動が祭りに及ぼした影響を論じた研究もある。野口省吾は，奈良県磯城郡川西村における宗教生活について，特定の権力者の不在や離村の緩慢さ，村に残っている老人の影響力の増加といった社会的要因により宮座が残存し，氏神信仰の衰退には歯止めがかかっていることを指摘している（野口，1969：82-83頁）。

ただ，大勢を占めるのは同族研究や事例採集で，それらは「祭」であり「公祭」である祭りを取り扱う研究だった。その状況に変化が訪れるのが経済的には安定成長期に入った70年代から80年代で，この時代を通して主な研究対象が「祭礼」や「私祭」にシフトしたと考えられるため，次節では安定成長期を取りあげて時代背景および諸研究を確認する。

2-2. 心の豊かさや選択縁の登場

1973年，第一次オイルショックを契機とする世界的な経済危機の中で，日本の高度経済成長期は終わりを告げ，安定成長期へと移行した。

経済成長で社会には物の豊かさがもたらされ，人々の志向は心の豊かさに移っていく。総理府（現内閣府）による「国民生活に関する世論調査」を見ると，「これからは心の豊かさか，まだ物の豊かさか」という質問に対しては，1979年から現在に至るまで「心の豊かさ」が上回る結果となっており，また「将来に備えるか，毎日の生活を充実させて楽しむか」という質問に対しては，1986年以降「毎日の生活を充実させて楽しむ」とする回答が優勢のまま現在に至っている⁽⁷⁾。

こうした志向のシフトに，人々は心の豊かさを獲得するために何を選ぶのか，逆に提供する側はいかなる選択肢を発信するのかといった，社会関係につ

(7) 内閣府「国民生活に関する世論調査」〈<http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-life/index.html>〉（2016年3月13日参照）

いての問いかけができよう。本節では、主題である祭りを例にとって応じることにしたい。

安定成長期を通して、主な研究対象が祭から祭礼、公祭から私祭にシフトしたと先述した。それは社会関係に焦点を合わせ、得られた成果と無縁ではないと思われる。社会関係を微細化していけば個人に行きつき、個人を巡る争点の一つである主体性は、祭礼や私祭との親和性が高いことがその理由となる。

社会関係に焦点を当てた研究として、まずは中村孚美の研究があげられる。中村は、秩父祭りに関する先行研究に触れつつ、祭り全体の設計と計画、実施への手順や参加の仕方など、祭りに対する人々の関与・意味付けといった面まで必ずしも調査が及んでいないことを指摘し、その精査に取り組んだ（中村、1972：152頁）。和崎春日が行った左大文字の調査と米山俊直の祇園祭の調査を見ると、和崎は「宗教集団や祭祀組織に引きつける事によって、祭礼と都市社会との関係を見ていく」こと（和崎、1976：3頁）、米山は「祭りの全体像をとらえ、を通して京都という都市の文化と社会を理解」すること（米山、1974：13頁）を述べており、都市社会で行われる祭りに直接参加する集団と、観衆のような周縁に位置する集団との関係を研究対象としている。

次第に、祭り研究が人々の関与・意味付けに及ぶようになると、研究対象はよりミクロな部分に移っていく。上野千鶴子は、共同体の理解という点に着目し、血縁・地縁・社縁の三類型を「選べない関係」と位置付けたうえで第四の類型に、社会関係に拘束性のない「選択縁」という「選べる関係」をあげた（上野、1984：56-58頁）。日常の社会関係である血縁・地縁・社縁から解き放たれた個人同士は、祭りという場で発生する選択縁で結び付く。それによって人々は、何らかの地位・役割のうえに結び付いている関係ではなく、素の自分のうえに結び付いている「選ばれた関係」（上野、1984：63頁）を体験できる。

上野によるこの考察は、祭り研究に後述の消費社会的な文脈を導入した嚆矢として評価できる反面、祭りは選べる関係を持つ個人が創るものとする視点を重視するあまり、選べない関係のうえに成り立つ祭りに対しては距離を置く姿

勢を後々残していった点には留意する必要がある。

以上、社会関係に焦点を当てた諸研究を概観したが、「祭・祭礼」の軸では祭礼の存在感が増しつつあること、そして「公祭・私祭」の軸では私祭へと重心を移していく状況が確認できた。加えて、前章では諸概念ともに多かれ少なかれ「信仰」を含むものだったが、上野の考察に見られるように、参加者を軸とする概念、すなわち「公祭・私祭」にあつては、必ずしも信仰が含まれていないことを指摘できる余地が生じたように思われる。

次章では、バブル景気とその崩壊を挟んだ90年代から現在に至るまでを期間として、安定成長期の祭り研究の趨勢、つまり研究対象のシフトがさらに進行した状況を確認する。そして、祭りは個人の満足のために消費されるものとする「消費社会的文脈」と、そのうえで祭りは地域集団によって実践されるものとする「共同体的文脈」に分化しているとの想定の下、諸研究を整理していき、「祭・祭礼」「公祭・私祭」の諸概念についても、そうした今日的文脈の中に捉え直す作業を試みる。

3. 1990年代以降の祭り研究

3-1. 「文化」に言及する諸政策

90年代はバブル経済の崩壊で始まった。日本はこの後、経済的には停滞期を迎えるわけだが、本稿ではこの時代を経済的観点というよりは、むしろ文化的観点から確認していきたい。具体的には、国土政策に見られるマクロな政策構想上で「文化」が重視され、また地域振興を図る手段として文化を「活用」と言明した法律が制定された点である。

1988年、当時の竹下内閣が打ちだした施策に「ふるさと創生」事業があり、1億円が全国市町村へと一律に交付された。神崎宣武は、この事業は1987年策定の「第四次全国総合開発計画（四全総）」のコンセプトである多極分散型の国土形成、つまり「定住と交流による地域活性化」を施策化したものであるという（神崎、1997：261頁）。その後、1998年に「二一世紀の国土のグランドデザイン（五全総）」が策定される。ここでは「文化の創造に関する施策」と

して一章が割かれ、「地域の特色ある文化は、地域のアイデンティティを形成し、住民が自らの住む地域に誇りと愛着を持つ契機となり、個性的で多様な地域づくりを支える柱となるものである⁽⁸⁾」と述べられている。

また、1992年には「地域伝統芸能などを活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律（おまつり法）」が制定される。これは「地域の民衆の生活の中で受け継がれ、当該地域の固有の歴史、文化等を色濃く反映した伝統的な芸能及び風俗慣習」を「地域伝統芸能等」と定義し、その活用によって観光および特定地域商工業の振興を図ることを目的とした法律であるが⁽⁹⁾、これらから、80年代後半から90年代にかけて、地域振興の手段に文化を「活用」する発想が生じたこと、つまり政策上のキーワードに「文化」が位置付けられたことがわかる。

時勢も影響しているであろうか、祭りの調査・分析の中に、地域活性化の視点を含んだ研究が提出されるようになってくると、賑やかな要素としての祭りが一層その存在感を増している事態を看取できる。そして、同じ地域内の祭りでも参加者の意味付けが多様であることもわかるが、それは参加者が祭りに関係する姿勢が一様ではないことを示している。この点を踏まえて次節以降、祭り研究が消費社会的文脈と共同体的文脈に分化しているとの想定の下、諸研究を整理していく。

3-2. 消費社会的文脈と祭り研究

本節では、祭りは個人の満足のために消費されるという立場の「消費社会的文脈」に対応した研究事例をいくつか取りあげる。

まずは松平誠の「高円寺阿波おどり」の調査がある。この祭りは1957年、

(8) 国土交通省「21世紀の国土のランドデザイン：地域の自立の促進と美しい国土の創造」〈http://www.kokudokeikaku.go.jp/document_archives/ayumi/26.pdf〉(2016年3月14日参照)

(9) 総務省「地域伝統芸能などを活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」〈<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H04/H04HO088.html>〉(2016年3月14日参照)

町おこしを目的に開催される。その特質について松平は「不特定多数の個人が自分たちの意志で選択した、さまざまの縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」「連」「講」などを形成してつくりだす」もの（松平，1990：4頁）と指摘し、さらには「個人的な「意味の世界」⁽¹⁰⁾を成立させながら、行為の面では、共同を成立させる」祭り（松平，1990：355頁）だと述べる。

次に高知の「よさこい祭り」を調べた内田忠賢の研究を見る。よさこい祭りは1954年、商店街の活性化を意図して始められた祭りで、その特徴について内田は「神仏が登場しない点でイベントと呼ぶにふさわしい都市祝祭の筆頭」（内田，2000：131頁）と述べ、魅力としては、参加者の増加による規模の拡大と流行に敏感に反応して変化する「見せる踊り」を持つことをあげる（内田，2000：134-135頁）。

また、1992年からは北海道で「YOSAKOI ソーラン祭り」が行われるようになる。矢島妙子はこの祭りが持つ特徴について、伝統的祭礼と比較して形式的な拘束がないこと、多様なローカルアイデンティティの表出ができること、同じ「よさこい」というつながりが持てることを理由に、差異化と統一化の両方の性質を持つことをあげる（矢島，2000：167頁）。

これらの分析に共通している点は、第一に形式的な拘束が限りなく自由であること、第二に個人が自由に参加できること、第三に参加者の意味付けが多様であることだとまとめられる。端的に言えば「個人」が非常に強調されており、これらの祭りが残すものは「個人個人の自己充足感であって、過去の伝統的祭礼のように、地域社会に求心的にはたらいで社会統合を果たすものではない」（松平，1990：351頁）と述べられている点に集約されるであろうし、そのため共同体の存在も多く語られることはない。つまり、本稿で消費社会的文脈

(10) 「共同の成立」について、後に松平は、その共同行為とみえるものは、参加者個々人の心象風景にもとづくヴァーチャル・リアリティの世界だと述べている（松平，2000：211頁）。共同は個人の意味付けとは別に成立するものではなく、個人の意味付けが重なり合った結果、偶然的に成立しているのが共同だという意味だろうが、ここでは個人が徹底的に強調されていることがわかる。

と位置付けた諸研究にとって、祭りとは個人の満足のために活用され消費されるもので、そこに働く論理は、祭りは選べない縁ではなく選べる縁によって成立していると上野が述べた事柄の延長になる。

以上を勘案したうえで今一度、参加者を軸とする「公祭・私祭」概念について検討を加えていくと、両概念とも、祭りを個人の満足のために消費する発想が生じた今日、すでに信仰という枠から離陸を果たしたと判断できる。それによって参加への意味付けを巡る記述では、信仰を含んだ態度だけではなく、信仰を含まない形で選べる縁に陣取った個人、あるいは選べない縁に留まった人々を捉える概念としても使用可能となる。後者に関しては、次節の共同体的文脈に位置付けられる諸研究を通してさらに検討を加える。

3-3. 共同体的文脈と祭り研究

地域集団によって実践される祭りという立場を取るのが「共同体的文脈」に当たる研究となる。その事例に「だんじり」と呼ばれる山車を用いる祭りを対象とした野中亮と吉田竜司、有本尚央の研究を取りあげるが、先に本節で論じる「共同体」について、それは特定の地域社会を指すもので、ここでは地域集団と表現していることと、その実態には川村清志が論じている、作業ごとに臨機応変に形成される「流動性」と濃淡のある参与という「冗長性」を持つ集団（川村、2010：45-46頁）を念頭に置いていることを述べておきたい。

まず野中は、大阪府堺市鳳の大鳥大社例祭、通称「鳳だんじり祭」を調査している。そこでは、鳳地区で用いられるだんじりの型や曳行様式が、後述する岸和田市の「岸和田だんじり祭」に近づいているという祭事の「岸和田化」と、祭礼組織の人选が自治会組織にも共通するためにだんじりへの貢献と地域内キャリアが密接な関係にあることが確認されている（野中、2007：171-174頁）。

岸和田だんじり祭における、祭礼組織内でのキャリアパスを扱った調査が有本の研究となる。町内祭礼組織で役職を務める者の多くはそれらを取りまとめる連合組織とを往復するキャリアパスを描き、往復によって祭りを管理・運営

する能力を習得した者はその権威を高めると同時に、そうした人物によって構成される連合組織もまた強い権威を得るという指摘は（有本，2012：32頁）、野中の研究とともに地域集団に埋め込まれた「キャリア」が祭りに及ぼす影響を物語っている。

次に、吉田は「岸和田だんじり祭」の一つに括られている、岸和田市春木地区の彌榮神社例祭について、それを「地域固有の文化として自律的に執り行われてきた伝統的祭礼」（吉田，2010：28頁）と位置付け、維持問題を考察した。そこで明らかになったのは、調査地域における曳き手の往き来が「一定の文化的同質性を担保された〈祭縁〉からなるゆるやかな相互動員のネットワーク」を形成させ、祭りの規模と質を維持させる機能を持っていることだった（吉田，2010：39頁）。

このネットワークを広域的かつ流動的に把握して、吉田は「祭礼文化圏」と名付け、単一祭礼間にある相互関係に言及したが（吉田，2010：39頁）、野中も自身の調査地域である鳳地区が、岸和田市を中心とした「だんじり文化圏」の周縁に位置することより、人の周流が祭りの斎行様式に与える影響を指摘している（野中，2010：307-309頁）。

曳き手の往き来や人の周流、いかえれば参加者が自身の所属地区を超えて祭りに参加している状況が示す通り、地域集団によって実践されるといっても、消費社会的文脈で強調されていた個人の主体性は重要さを失っていない。つまり、祭りへの参加の是非を決めるのは個人だという点では選択縁の範疇にあるし、参加者の満足のために使用される点は消費社会的だともいえるのだが⁽¹¹⁾、本節で重要なことは、個人の主体性を前提としたうえで地域集団による祭りの実践が確認されている点にある。地域集団を弾力的な、すなわち本節はじめに述べた特徴を有する存在と捉えるならば、「祭りを存続させたい」狭い範囲の地域集団は、吉田のいう「祭礼文化圏」に属する「祭りにつながりたい」個々人を確保しながら祭りを維持しているといえようし、それを成立させてい

(11) 上野も、地域集団（地縁）による祭りに言及した際「成員によって選びとられた選択縁の祭りの要素を持っている」と指摘している（上野，1984：68頁）。

る要素には地域内部でのみ通用する能力と実践によって得られる「キャリア」という選べない縁の産物がある。本節の研究事例は、選べない縁に留まった人々を捉える「公祭」が、今日の共同体でいかに形成されているかを具体的に記している。

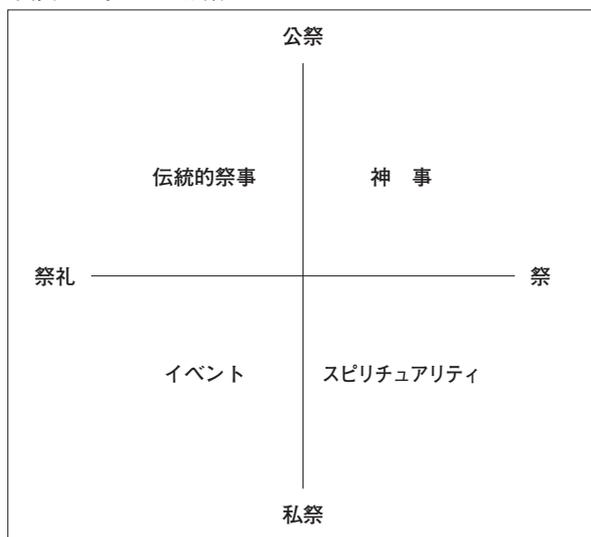
ここまで、柳田の「祭・祭礼」「公祭・私祭」といった諸概念を検討しながら、戦前から現在に至るまでの日本の祭り研究を概観してきた。整理していくと、まず研究対象が祭から祭礼に拡大・変遷した点を指摘できる。それは、昔から続いてきた神事から新たに創りだされる行事を追いかける形のシフトであったが、その先では、新たな行事だけでなく旧来の祭りの今日的な適応を確認できた。

ところで「祭・祭礼」で把握できるのは「神事・非神事」の枠組みを超えるものではないため、祭事に対する参加者の意味付けは「公祭・私祭」の概念で捉え直そうというのが本稿の試みであった。そこではまず、見えない宗教の進む事態、つまり神事か否かは個人が決定する流れがあった。その後、信仰という枠から切り離された概念となって、選べる縁に陣取った個人に対する概念を「私祭」、選べない縁に留まった人々に対する概念を「公祭」とそれぞれ捉え直した。

以上をまとめると、祭りという言葉には、客観的な神事性を巡る「祭・祭礼」の軸と、参加者の主観的な意味付けを巡る「公祭・私祭」の軸がある。この「祭・祭礼」「公祭・私祭」を組み合わせ、祭りが指し示す出来事を分類した図が以下となる（図表1）。

順に確認すると、祭に接近する公祭は神事として現れ、例えば神社における神楽奉納や巫女舞、神輿渡御などがあげられる。逆側の祭礼に接近するならば祇園祭や岸和田だんじり祭の山車運行に見られる伝統的祭事、祭礼に接近した私祭であれば高円寺阿波おどりやよさこい祭りのようなイベントとなるが、これは研究対象上の変遷にも対応している。祭に接近する私祭は個人祈願に相当するが、ここでは神秘的なもの和个人のつながりを示すスピリチュアリティとした。これは神事性の解釈を徹底して個人が行う場合、その形態を示す

図表1 祭りの四分類



(倉田作成)

のに一番適切な表現だと考えたためである。

このように分類できる祭りであるものの、本稿冒頭でその定義は困難で捉え方や評価も多様だと述べたように、分類のいずれかに収まりきる祭りなど極めて稀なケースであることは、意味付けが多様化する今日では当然のことだといえる。イベント性が最も強調されていたよさこい祭りですら今日ではその歴史性を掲げて、伝統的祭事に接近しており、岸和田だんじり祭を見れば、神事であり伝統的祭事でもありながら、なおかつイベントの様相も呈している。では、分類をまたぎながら行われている祭りは、実際はどのようなものとなるのか。これまでの研究史より、次章では今日の地方都市で行われている祭りを対象に、その実践を確認していく。

(12) よさこい祭振興会「南国土佐・高知「よさこい祭り」公式 Web サイト」〈http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/k_yosakoi/〉(2016年3月31日参照)

4. 地方都市における今日的祭礼

4-1. 調査地域について

ここからは、地方都市における今日的祭礼の事例に、香川県綾歌郡宇多津町の宇夫階神社で例年10月第4週の金曜から日曜にかけて斎行される例祭を取りあげ、例祭に関与する地域住民の実践を中心に確認していく⁽¹³⁾。

(1) 調査地の概要

まず、宇多津町と宇夫階神社および同社例祭の概要を記述しておく⁽¹⁴⁾と、同町は香川県中央部の瀬戸内沿岸に位置し、人口は直近で19,073人である。かつては高松藩の藩倉が置かれ、経済活動が活発に営まれたとともに塩業の盛んな地として栄えたが、1971年の塩田廃止以後は跡地の整備による新都市形成を施策の中心に据え、商業に軸足を移していく。現在は上記の新都市とかつての市街地（旧市街地）、内陸部、この3エリアから構成されており、そのうち旧市街地では「古町」と称して同町の歴史を活用したまちづくりが行われ、内陸部では分譲住宅地やアパート建築による住環境の整備が進んでいる。

宇夫階神社は、先のエリアでいえば旧市街地に当たる同町1644番地に鎮座している。地域の氏神である同社の主祭神は^{おおなむちのみこと}大己貴命で、配祀祭神は^{とようけすめ}豊受皇^{おおみかみ}大御神、その創建は779年と伝わり1200年以上の歴史を有する。また、国史『三代実録』にその由緒が記されていることより、国史現在社ともされる同社では、年間を通して様々な祭事が執り行われている。その中でも、最も厳かかつ華やかに斎行されるのが、例年10月第4週の金曜から日曜にかけての例祭である。

同社例祭は、古くは^{さるとりまつり}申酉祭といわれ、旧暦10月中の申酉日に厳修されてい

(13) 本稿では紙幅の都合上、関与者の動向のみに焦点を絞っている。同社例祭の詳細については、関・倉田(2015)「地方都市における祭りの機能に関する一考察：宇多津町宇夫階神社例祭の事例より」『四国学院論集』(147)73-105頁を参照されたい。

(14) 2016年2月1日現在推計値にもとづく(宇多津町、2016:22)。

たが、現在は上記の三日間の斎行である⁽¹⁵⁾。日程には境内摂社である鹽竈神社の例祭も組み込まれており、金曜は鹽竈神社の宵宮祭、土曜は鹽竈神社の本祭と宇夫階神社の宵宮祭、日曜は宇夫階神社の本祭となっている。祭りの様子をごく簡潔に述べると、宵宮祭では各自治会の獅子舞が奉納された後、神楽の奉納がある。本祭では獅子舞奉納の後、御霊移しの儀が執り行われて神事場への神輿渡御が始まり、神輿のお供として各自治会の太鼓台が続く。神事場は聖通寺と田町の二箇所があり、一年ごとに行き先が交代する。両社の斎行様式に大きな差は見られないものの、祭儀での朝日舞の有無や献饌の仕方、神輿行列での社名旗の有無や神職の装束、獅子舞奉納を行う自治会の多寡といった神事面での諸要素に、本社と摂社の違いを確認できる。

(2) 例祭の関与者

次に、例祭に関与する地域住民を確認していくと、三つに大別できる。まず行政との接点が高い団体に「宇多津太鼓台保存会」「太鼓台祭り実行委員会」がある⁽¹⁶⁾。神事に関わる人々には、神社運営に携わる宇夫階神社の関係者および氏子組織が、祭礼面に関わる組織には獅子舞・太鼓台を保有する各自治会がそれぞれあげられる。

「宇多津太鼓台保存会」から説明すると、同保存会は1972年に設立された団体である。同町広報によれば、例祭に参加する太鼓台の減少を機に設立されたもので（宇多津町、2012：4頁）、D氏は、伝統ある祭りの継承をしていくために設立されたのだろうと話す。同保存会は、町内の太鼓台・獅子舞の保存を目的とした団体だが、同時に、例祭に参加する太鼓台・獅子舞の統制も意図している。活動内容は、各自治会で行われる太鼓台の修繕・新調にかかる費用

(15) 例祭に先立つ2週間程前、初申の日に「初白祭^{はつもうしまつり}」という同社の特殊神事がある。この日、例祭の吉凶が占われると同時に、当屋の鞆物と太鼓台の運行順がクジで決められる。

(16) 宇多津太鼓台保存会・太鼓台祭り実行委員会の両団体および行政に関する記述は、宇多津町教育委員会事務局生涯教育課・N氏、宇多津太鼓台保存会副会長・D氏へのインタビューにもとづく。日時は、N氏が2014年9月19日、D氏が10月16日となる。

や、祭りの際に警備会社へと支払う費用などの供出がある。太鼓台の運行規程の制定やお花（ご祝儀）集め時の関係者の成りすましといった似非行為防止の周知、また例祭時のゴミの回収作業にも同保存会が携わっている。

「太鼓台祭り実行委員会」は1993年、例祭とは別に始まった「宇多津太鼓台祭り」というイベントのための組織で、保存会の下部組織に当たる。同委員会は、太鼓台祭り以外にも「宇多津夏祭り」や「宇多津アロハナイト」など、地域活性化を図るイベント活動も担っている。そのため、保存会は教育委員会から予算が下りるのに対して、同委員会はまちづくり課から予算が下りている。

神事に関わる人々には、神社関係者や同社の氏子組織があり、そのうち「氏子祭奉賛会」を取りあげる⁽¹⁷⁾。例祭時、主に活動するのは氏子のうち総代職にある人々で、その活動は神輿行列の管理、例祭にかかる費用の調達、例祭に出店している露天商への巡回の三つがある。神輿行列の管理とは、神輿の担ぎ手を近隣の高校・専門学校の学生に依頼しているため、行列に加わる一般の氏子を含めてその監督を務めていることである。氏子組織は太鼓台にほとんど関与しないが、神社も同様に、事前の安全祈願祭や例祭時も太鼓台の御祓いや御幣の受け渡しといった場面以外で関与することはほとんどない。

祭礼面に関わる組織には、獅子舞・太鼓台を保有する自治会があり、本稿では「海岸町自治会（海若太鼓台）」を取りあげる。海若太鼓台は、掛け声とともに地面に太鼓台を落とす他の自治会とは異なり、太鼓台を落とさずに差し上げており⁽¹⁸⁾、幼稚園児や小学生でも運行できる子ども太鼓台も保有していることが特徴である。太鼓台の維持・発展を目的に、同自治会は2008年に「友愛会」という組織を発足させ、自治会の内外から太鼓台が好きな人々を募っている。また、海若太鼓台には坂出市の企業「川崎重工」に勤める人々が担ぎ手に加わっているが、これは企業内にある「川重海若愛好会」でのつながりによる。

(17) 氏子組織に関する記述は、宇夫階神社氏子総代・M氏へのインタビューにもとづく。日時は2014年10月12日となる。

(18) 宇多津の太鼓台が持つ特徴は、掛け声とともに地面に太鼓台を落とすことで、そこには地鎮（土地神への儀礼）の意味が込められている。過去には海若太鼓台も行っていたが、太鼓台の新調によってできなくなった経緯がある。

4-2. 「公祭」「私祭」に見る人々の実践⁽¹⁹⁾

この例祭は、先述の分類をまたぎながら行われている祭りといえる。つまり、ある参加者にとっては神事や伝統的祭事でありながら、別の参加者にとってはイベントでもある。本節では、その実践の様子を見ていく。

宇夫階神社は地域の氏神を祀る社であることは述べた。そもそも、氏神が年に一度、神輿渡御で管轄する地域を巡回して氏子の人々を見舞うのが例祭という時空間である以上、この点に関わる儀礼は「公祭・祭」に分類される神事である。氏子も儀礼を神事と認識しているため、場の秩序を維持しようとする行動を起こし、居合わせる人々もそれに従う。1894年に神社と氏子の間で「盟約証」⁽²⁰⁾が交わされて以降、神輿行列が厳粛に執り行われていることはその理由となるが、これは昔からの地域集団と神が結ばれているところにある祭りの実践ともいえる。

太鼓台保存会・太鼓台祭り実行委員会の両団体が設立された理由は、伝統ある祭りを継承していくために太鼓台を保存し、またそれを活用した新しい祭事を行うためであった。太鼓台が関わる場合は例祭のうちでも祭礼要素が強く、その保有者は町内の自治会であることを鑑みるに、団体および自治会（太鼓台）は、地域住民が主体となって行う「公祭・祭礼」に分類される伝統的祭事として例祭を把握、その活動を行っていると考えられる。ただ、2015年9月に「宇夫階神社・鹽竈神社祭礼神幸行列保存会」という新たな団体が設立され、太鼓台保存会と各自治会もメンバーとなっている。同会の目的は「神幸行列を実施し、この伝統文化を後世に継承することで宇多津町の町おこしの一助とすること」であるが、ここでの太鼓台保存会と各自治会は、伝統的祭事の活用を考慮する立場であると同時に、太鼓台を神事に近付けることを意識する立場にも置かれている。それは、伝統的祭事による活力の創出を図りながら、地域内に生

(19) 本稿で扱う資料は、宇夫階神社宮司・M氏より提供されたものであることを記しておく。

(20) 例祭時の取り決めとして、例えば、神輿行列の列次や渡御・還御の時刻、太鼓台の行列順、またその喧嘩などに対する注意が記載されている。

きる伝統も守るという二正面に対応する実践となる。

今日、太鼓台運行を取り仕切る者は各自治会の内部から選出されるケースが多数だが、例祭時、実際の担ぎ手は自治会内外の参加者で構成されている。そのため、運行に深く携わる人物は「公祭」に接近しているといえようが、それほど深く関与していない実際の担ぎ手、とりわけ他の地域から担ぎに来る人々にとっては「私祭・祭礼」に分類されるイベントとして認知されていると考えられる。太鼓台を担ぐことに楽しみを見いだしている人々は、選択肢の中から同社例祭での太鼓台を選んで参加しており、これは祭事を自己充足のために消費する姿勢とも取れるためである。ただし、内部の参加者にあっては実際に太鼓台を維持する必要から自己充足のみに帰せるものではなく、外部からの継続的な参加者も、時を経るにつれて自らが関与する地域集団に何らかの感情を抱くことは想像に難くない。

再び海若太鼓台の事例をあげると、先に見たように同太鼓台は外部との交流を積極的に推し進めている。⁽²¹⁾それは組織構成にもあらわれており、2015年から運行組織の要職である太鼓台総代には、外部の人物となる川重海若愛好会所属のM氏が就いているが、この人事は「頭を取れる人間が頭を取ればいい」とする同太鼓台の方針に沿うものである。日曜日、太鼓台運行を全て終えた際のラストスピーチでM氏は「本当に皆さんが色々協力してくれて……凄いいい祭りができたなと自分では思っています」と語ったが、その語りからは達成感や連帯感を読みとれる。また「自分の勝手に（神輿の渡御先である）田町の神事場に行かせて頂いたり」と語った箇所では、例祭が持つ地域的特色を理解しようとする一面をうかがえる。⁽²²⁾つまり、継続的な参加者にとってみれば「私祭・公祭」の境界線は極めて曖昧なものであり、組織構成次第で、元々は私祭側の

(21) 海若太鼓台は他太鼓台と比較して内部の担ぎ手の減少が深刻であり、一時期は海若太鼓台自体の存続が危ぶまれた。その際、存続しなければ意味がないとして外部との交流を進めてきた経緯がある。

(22) 太鼓台は神輿行列に組み込まれているため、本来は「神事場」まで同行することになっている。ただ実際には、神事場へのルート上に保管場所を持つ太鼓台以外は、各々の都合もあって三々五々帰還しているが、そうした事情もあつての発言と思われる。

参加者が公祭側に移行するケースもあることを、海若太鼓台の事例は示している。

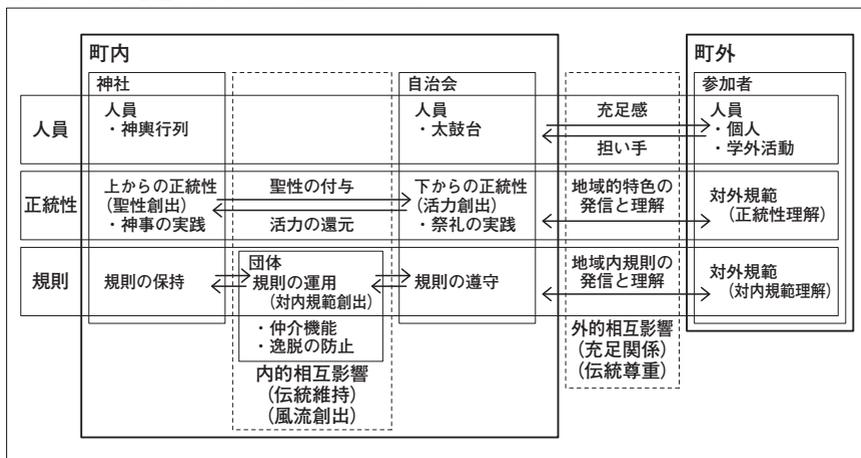
以上見てきたように、今日的祭礼を実践している参加者の意識は多様であり、関係もまた複雑である。次節では、参加者間の影響関係を図化し、その分析を試みたい。

4-3. 例祭を通じた影響関係

複雑な関係とは、影響関係を把握しにくい状況とも表現できる。本章を通じて確認してきた諸関与者の具体的な行動が例祭に結実する。だが、行動の一つ一つを正確に追ったとしても、総体としての影響関係は漠然としたままである。さしあたり分析を進めるためにはモデルが必要となるが、宇夫階神社例祭の事例に関していえば、それは次のように図化できよう（図表2）。

まず、影響関係自体は内的相互影響と外的相互影響に大別できる。町内（祭礼組織内）で生じる影響関係と、町外と接するところに生じる影響関係である。行為主体だが、同社例祭では神事面はもちろん、祭礼面でも太鼓台の特質

図表2 例祭を通じた町内外の相互影響関係



(倉田作成)

上、観衆が見学以外で何かの影響を与える、例えば祭事の進行につれて関係者に転ずるといった状況は想定し難いため、町内の関係者は「神社・自治会・団体」と区分し、町外の関係者は参加者に限定している。例祭で影響が生じている部分については「人員・正統性・規則」の三つに整理している。

先に、町外との関係から確認できる点を列挙していく。人員部分では、町内との個人的なつながりや学外活動の一環として町外の参加者が加わり、町内の神輿・太鼓台の担ぎ手（担い手）となっている。その人々は個人的な充足感を対価として得る。正統性と規則については、町外からの参加者は基本的に担ぐ以外で町内と特別の関係にあるわけではないため、正統性と規則は町内から発信される「地域的特色」や「地域内規則」として町外参加者に理解される。図化に際して、これらの理解を「対外規範」と総称したが、具体的にいえば出向いた地域で大事にされている事柄を尊重する姿勢や、タブー視される行為は慎むといった心がけである。

以上が外的相互影響のうちでも、その場限りで発生している影響関係といえる。ただ、その場限りだけではなく持続的な影響関係も当然予想できる。この持続的な影響関係と考えられるのが、人員部分では「充足関係」としている担い手・充足感の継続的な交換で、正統性と規則の部分では対外規範とした事柄をさらに内面化する「伝統尊重」の姿勢となる。

内的相互影響は、外的相互影響と比較して事態を複雑とする。人員・正統性・規則の順に説明すると、例祭の町内参加者は「氏神－氏子」関係にあると把握でき、人員の関係は正統性の部分に見ることができる。正統性を極めて単純化するならば、ある事柄に対して人々が正しいと考える概念となるが、神社の祭りでの正しさは神社および神事に求められる。例えば、太鼓台に対して神社側が直接的に参加の可否を示唆することもそうだが⁽²⁴⁾、それ以上に例祭に埋め

(23) 「基本的には」と断っているのは、町外参加者のうちには神輿行列に加わる巫女の一人団や神事を担う神職、伶人といった人々も含まれるためである。

(24) 太鼓台が神輿行列の一員である以上、行列を妨げてはならないが、2014年の例祭時、太鼓台のトラブルで行列に差し支えが生じたことがあり、2015年の初白祭で各太鼓台の代表者が集った際、神社宮司に注意される一幕があった。

込まれている宗教的な意味、すなわち聖性は神事から発生することから、聖性が付与されていない太鼓台や獅子舞といった事物は、例祭という時空間に在ることを説明する根拠を失う。この点より、神事の実践を「上からの正統性」と表現できる。逆に「下からの正統性」は祭礼の実践となる。聖性が付与された事物は根拠を得られ、例祭内で展開される行動は本章を通して確認した通りだが、それは事実上、祭礼面において例祭を支持する行動となっている。そこには厳かな神事とは異なった情熱を持つ実践があり、この実践によって例祭に人を引き付ける力という、現代の神社祭礼を成立させる方向に働く活力が創出されるためである。

改めて正統性の部分を確認すると、神社（氏神）は各自治会（氏子）に神事を通して聖性を付与し、各自治会は神輿行列への参加や獅子舞奉納、また太鼓台が創出する活力を通して神社へと還元される互酬関係が指摘できる。それは一方で神事の実践から正統性を発生させる試みであり、もう一方では祭礼の実践から正統性を発生させる試みでもある。例祭は斎行されることによって「正当性（本稿で用いている正統性）」を自らに発生させ、正統性は例祭の参加者により強力に意識されるが（関・倉田、2015：98頁）、この還元について詳細に捉えたのが上述の内容となる。

続いて規則では、団体が中間組織として仲介機能を有している点を指摘できる。神社が「盟約証」に遡る地域内規則をこれまで保持してきた存在とすれば、例祭に関与する太鼓台保存会や行列保存会の両団体は、保持された規則を今日通用する規則にカスタマイズしている、つまり実質的に規則を運用している立場で、それは例祭を滞りなく行うための「対内規範」を作り出す立場ともいえる。ここで作られた対内規範を通じて、団体は逸脱行為の防止を担うと同時に、神社と自治会の間を仲介する。団体が作り直した対内規範を遵守するのが自治会となる。自治会は規範の遵守を通じて、例祭の斎行および保有する太鼓台の保存を図る。そして例祭が滞りなく斎行されることで、神社は昔から保持してきた規則にまた一年の歴史を刻み込む、こうした内的相互影響が発生していると考えられる。

ここまで内的相互影響のうち、例祭その場限りの影響関係を述べたが、先ほどと同様、持続的な影響関係も考えられる。それは、例祭が斎行された結果から生じる「伝統維持」と「風流創出」の二つである。もちろん、ただ単に斎行されたから伝統が維持されているという意味ではないものの、それを目的に据えるか否かに関わらず、諸主体の行動によって達成されている点に限れば、そう述べることもできよう。すなわち、正統性への強力な意識が成立するところに、物の継承、対外広報、斎行の固守、大々的な斎行といった諸関係者の行動が生じるが（関・倉田、2015：98頁）、決して体系化されていない諸々の行動が図らずも伝統維持に働く影響関係を構築している点である。

風流については、祭事に新たな趣向を凝らすという祭礼に関する概念である以上、その創出を担う主体は町内の自治会となる。では、各自治会はどこからアイデアを得ているのかと思案すれば、それは外との交流に求めることができる。先ほど、地域的特色・地域内規則の理解について町外参加者の立場から述べたが、町内の人間が外の祭りに参加するとき、その立場は逆転して、外の祭りが持つ特色や規則を理解する側に立つことになる。そして、他地域の特色や規則との接触によって得た情報は地域内部に持ち込まれる。これだけを見れば、風流の創出は外的相互影響に数えられようが、風流は競い合いの要素も持つため、得た情報から新たな趣向を創りだすうえで主導権を握るのは町内の人間となるであろうし、地域内のコードを読み解きつつ取りこめる存在も同様であることから、接触以後に影響を与え合う関係はむしろ内部に求めるのが適切と思われる。関係者によって逸脱なく取りこみに成功した事物は、内部に浸透していき新たな趣向として確立する⁽²⁵⁾。これが内的相互影響における風流創出である。このような影響関係の総体として立ち現れているのが宇多津町宇夫階神社の例祭、換言すれば地方都市の神社における現代の祭礼だといえる。

(25) 浸透しなかった事例に、太鼓台の中央にかける水引幕があげられる。宇多津町では幕の種類が「一枚幕」から「四枚幕」に移りかけた時期があったが、現在、四枚幕を使用する自治会は少数である。一枚幕を伝統的に使用してきたため浸透しなかったと捉えることもできるが、ここではむしろ他地域では四枚幕が「多かった」ため、新たな趣向として採用されなかったと考えるのが妥当に思われる。

おわりに

今日盛んに行われている祭りの核は個人の選択だと論じること、もしくは祭りの核は地域集団による神事とすること、どちらの指摘も間違いではなからう。研究史を振り返ると、戦後、それまで一般的であった「祭・公祭」の研究に対して「祭礼・私祭」に接近する潮流が生まれ、以降は個人に焦点が当てられてきたが、近年再び「公祭」側となる地域集団にも視線が向けられるようになりつつある。しかし川村が「祭り研究の多くは、伝統や慣習の遵守、社会集団への帰属を前提とする立場と自由意志をもつ個人による創造性を強調する立場に引き裂かれているように見える」（川村、2010：12頁）と述べるように、いずれかの立場に属するのみでは今日的祭礼を的確に把握するどころか、いたずらに視野を狭めてしまう懸念があるのは、これまで確認してきたことによって明らかである。

すなわち、今日的祭礼の分析で必要となるのは二者択一ではなく、複眼的な考察に努めることだろうが、本稿では第一の目的であった「祭・祭礼」「公祭・私祭」概念の捉え直しによって、その分析上で必要となる整理が行えたと判断している。相互影響関係の把握という第二の目的についても、非常に限られた範囲ではあるものの、複眼的に考察を進めることができた。加えて、香川県下における祭り研究で相互影響に言及した事例は少ないことより、本稿をもって研究の蓄積に貢献できたものと考えている。

ただし、論じ切れていない部分は多々ある。例えば、日本の祭り研究のうち、理論的分析を進めた領域として宗教学は取りあげて然るべきであったが、本稿ではほとんど言及できていない。地方都市における現代の神社祭礼の様相を把握することについても、一地点のみという限定的な調査に留まっているため、この先、比較考察が必要であることはいうまでもないが、これらを踏まえた論考は別の機会に譲ることとしたい。

謝辞：本稿の執筆にあたって、多くの方のご助力をいただいた。筆者（倉田健太）が在籍していた四国学院大学社会学部の先生方、とくに指導教員であった同学部・関泰子教授からは常に懇切丁寧なご指導を賜った。また、香川大学経済学部・原直行教授には本紀要への投稿を勧めていただいた。そして、宇夫階神社の宮司様をはじめ、調査地である宇多津町の方々は貴重な資料とご助言、何よりも今日に至るまでの大きな心の支えを下さった。この場を借りて心から感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 芦田徹郎（2001）『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社。
- 葦津珍彦（2006）『国家神道とは何だったのか』新版，神社新報社。
- 有本尚央（2012）「岸和田だんじり祭の組織論：祭礼組織の構造と担い手のキャリアパス」『ソシオロジ』57（1）21-39頁。
- 有賀喜左衛門・仲康（1962）「マキと祝神講」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』（1）105-115頁。
- 上野千鶴子（1984）「祭りと共同体」『地域文化の社会学』（井上俊編）世界思想社，46-78頁。
- 宇多津町（2012）『広報うたづ』（10月号）宇多津町。
- 宇多津町（2016）『広報うたづ』（3月号）宇多津町。
- 内田忠賢（2000）「変化しつづける都市祝祭：高知「よさこい祭り」」『祝祭の一〇〇年』（日本生活学会編，生活学第二十四冊）ドメス出版，130-147頁。
- 川村清志（2010）「祭りの習得と実践：子どもによる準備過程を中心に」『比較文化論叢札幌大学文化学部紀要』（25）7-54頁。
- 神崎宣武（1997）「「ふるさと創生」の決算書」『祭りとイベント』（小松和彦編，現代の世相5）小学館，257-285頁。
- 桜井徳太郎（1959）「チョウサまつり：讃州女木鳥祭礼聞書」『日本民俗学会報』（10）6-10頁。
- 関泰子・倉田健太（2015）「地方都市における祭りの機能に関する一考察：宇多津町宇夫階神社例祭の事例より」『四国学院大学論集』（147）73-105頁。
- 中村亨美（1972）「秩父祭り：都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』3（4）149-192頁。
- 野口省吾（1969）「村落における宗教生活の諸相：奈良県磯城郡川西村下永部落の場合」『ソシオロジ』15（1）53-83頁。
- 野中亮（2007）「「鳳だんじり祭り」の概要と課題：伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』（6）155-177頁。
- 野中亮（2010）「文化圏の視点による祭礼研究の可能性：堺市鳳だんじり祭りの事例から」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』（9）301-311頁。

- 松平誠（1990）『都市祝祭の社会学』有斐閣。
- 松平誠（2000）「都市祝祭論の転回：「合衆型」都市祝祭再考」『祝祭の一〇〇年』（日本生活学会編，生活学第二十四冊）ドメス出版，199-216頁。
- 宮本又郎編（2012）『日本経済史』改訂新版，放送大学教育振興会。
- 森田三郎（1990）『祭りの文化人類学』世界思想社。
- 矢島妙子（2000）「祝祭の受容と展開：「YOSAKOI ソーラン祭り」」『祝祭の一〇〇年』（日本生活学会編，生活学第二十四冊）ドメス出版，148-174頁。
- 柳田國男（2013）『日本の祭』角川ソフィア文庫。
- 吉田竜司（2010）「伝統的祭礼の維持問題：岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏」『龍谷大学社会学部紀要』（37）28-42頁。
- 米山俊直（1974）『祇園祭』中公新書。
- ルックマン，T.（1976）『見えない宗教：現代宗教社会学入門』赤池憲昭訳，ヨルダン社。
- 和崎春日（1976）「都市の祭礼の社会人類学：左大文字をめぐって」『民族学研究』41（1）1-29頁。

参 考 サ イ ト

- 国土交通省「21世紀の国土のグランドデザイン：地域の自立の促進と美しい国土の創造」〈http://www.kokudokeikaku.go.jp/document_archives/ayumi/26.pdf〉（2016年3月14日参照）
- 総務省「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」〈<http://law.egov.go.jp/htmldata/H04/H04HO088.html>〉（2016年3月14日参照）
- 内閣府「国民生活に関する世論調査」〈<http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-life/index.html>〉（2016年3月13日参照）
- よさこい祭振興会「南国土佐・高知「よさこい祭り」公式 Web サイト」〈http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/k_yosakoi/〉（2016年3月31日参照）